

潟県柏崎市にあり、精神科病床240床を有し、地域医療の中心として、また東京医科大学の関連病院、臨床研修病院として毎月研修医を受け入れ、精神科研修の場として充実を図っている。今回、当院における抗精神病薬の単剤化の現状と、入院と外来における処方用量、服薬回数、併用薬などについて調査した。その結果より単剤化の利点と、統合失調症患者の社会復帰において果たせる役割について考察を行った。

【方法】平成22年1月から3月にかけて柏崎厚生病院で抗精神病薬を投与された外来患者499名、入院患者99名を対象とした。その中から定型および非定型抗精神病薬の単剤化率、平均クロルプロマジン換算量、抗パーキンソン剤併用率、バルプロ酸などの感情調整薬併用率を調べ、用量や服薬回数などの関係を調べた。

【結果と考察】単剤化率は入院で31.1%、外来で63.1%であった。単剤は多剤併用に比べて平均クロルプロマジン換算量が少なく、抗パーキンソン剤の併用率や服薬回数を減らせることができていた。また定型と非定型で平均クロルプロマジン換算量や抗パーキンソン剤併用率で差が認められ、抗パーキンソン剤は単剤、多剤併用関係なく定型に併用されていることが多かった。以上の結果から、単剤化を進めていくことはアドヒアランスを改善し、統合失調症患者の社会復帰に貢献することが考えられた。

P1-16.

薬物療法に催眠療法を併用することで寛解に至ったパニック障害の一例

(茨城・メンタルヘルス科)

○川嶋 新二、市来 真彦、片山 成仁

以前から、パニック障害の症例に対して催眠療法が有効であったとの報告が少なからずなされている。パニック障害の治療法としては薬物療法、認知行動療法が現代に要請されるエビデンスの確立に至っているが、残念ながら催眠療法の有効性は十分に証明されていない。

演者は日頃パニック障害に対して催眠療法を行っているが、そのための方法は認知行動療法で利用されているイメージ曝露、身体感覚曝露を催眠状態下で行うことを基本としている。しかし治療の流れの

中で、患者の側から病態のベースに精神力動的問題が存在していることがほのめかされることは時々であり、その場合は患者の希望に添って、精神力動を探索するために催眠療法を行うこともある。

本発表では、20歳代で発症し、その後軽快していたものの近年増悪したためにT病院メンタルヘルス科に40歳後半で初診となり、催眠療法を薬物療法に併用することによって寛解に至ったパニック障害の一例の治療経過を報告する。初回セッションでリラクゼーションを体験してもらった後、イメージ曝露、身体感覚曝露を治療の中核に据える予定であったが、患者の気付きを大切に時々年齢退行や年齢進行などの催眠現象を利用して、患者の過去の精神力動的な気付きを促したり、今後の親との付き合い方などについて新たな視点が得られるよう援助したりした。その結果、治療経過の進行とともに患者の自信が積み上げられ、病状も消退していくのが観察された。

症例を通して、催眠療法は薬物療法のように症状軽減を目指すだけでなく、患者に新たな気付きや視点を持たせることを通して、患者の人格にも影響を与えることの出来る治療だと考えられた。また催眠療法は世の偏見とは異なって、治療者が患者に何かを植え付けるのではなく、患者から自発的に提供されるものを治療者が治療的な文脈の中で利用しながら実践されるのが望ましい、と締めくくる予定である。

P1-17.

老年期認知症における quantitative PCR 法を用いたテロメア長の検討

(大学院三年・老年病学)

○久米 一誠

(老年病学)

高田 祐輔、菊川 昌幸、羽生 春夫

馬原 孝彦、桜井 博文、岩本 俊彦

(内科学第一)

大屋敷一馬

(難病治療研究センター)

大屋敷純子

【目的】テロメアは、染色体末端に存在するTTAGGGの繰り返し配列をもつ塩基配列で、細胞

分裂毎に短縮し、細胞老化のバイオマーカーと考えられている。その短縮は老化・癌・動脈硬化などに関与することが示され、加齢と深い関わりのあるアルツハイマー病 (AD) でも、テロメア短縮と病態との関係が報告されている。そこで、我々は AD をはじめとする老年期認知症患者において、末梢白血球のテロメア長の測定を試み、その臨床的意義を検討した。

【対象と方法】 対象は AD 患者 74 例、レビー小体型認知症 (DLB) 13 例、軽度認知機能障害 (MCI) 6 名。35 人の正常高齢者コントロール (NEC) を対照とし、末梢血 350 μ l より automated magnetic bead system を用い genomic DNA を抽出した。Quantitative PCR 法は Cawthon らが報告した方法を一部改変し施行した。平均テロメア長はシングルコピーの遺伝子の増幅産物量に対する、テロメア配列から得られた増幅産物量の比 (T/S 比) で評価した。

【結果と結論】 平均テロメア長 T/S 比は MCI では NEC と差がなかったが、AD においては短縮傾向を認め ($P=0.1332$)、APOE4/E4 の表現型を有する症例では non-carrier と比較して有意にテロメア短縮を認めた ($P=0.0002$)。一方、DLB のテロメア長は症例により様々で、今後、加齢との関係、AD との異同などを明らかにする必要があると考えられた。以上より老年期認知症におけるテロメア動態は疾患特異的ではないものの、臨床病態を反映している可能性が示唆され、DLB を中心に症例の蓄積が必要と考えられた。

なお、本研究は文部科学省・私立大学学術研究高度化推進事業私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ナノ医工学を応用した再生医学研究拠点形成」(平成 22 年選定) の助成による。

P1-18.

海馬における海綿状血管腫と一過性全健忘との神経心理学的検討

(社会人大学院三年・内科学第三)

○井上 文

(内科学第三)

加藤 陽久、関 美雪、赫 寛雄

内海 裕也

【目的】 海馬に海綿状血管腫を呈した 1 症例と一過

性全健忘 (transient global amnesia: TGA) の 3 症例について神経心理学的特徴を検討した。

【対象と方法】 症例 1 (右海馬海綿状血管腫): 54 歳・男性、記憶障害を主訴に来院。右海馬に海綿状血管腫を有した。症例 2~4 (TGA): 62.5 ± 4.5 歳・男性 1 名、女性 2 名、いずれも可逆性の健忘を呈した。対象は全て右利きであった。全例に長谷川式簡易認知機能検査スケール (HDS-R) と Mini-Mental State Examination (MMSE)、および Wechsler Memory Scale-Revised (WMS-R) を行った。

【結果】 いずれも HDS-R と MMSE は正常範囲であった。WMS-R では、TGA 症例群では症例 2 で一般的記銘力の軽度の低下を認めたが、他の TGA 症例では正常範囲内であった。一方、症例 1 の WMS-R では注意・集中力を除く全ての項目で低下しており、遅延再生が顕著に低下していた。

【考察】 WMS-R は一般的記銘力、注意・集中力、遅延再生を評価できる。TGA は発作後の前向性健忘と短期の逆行性健忘を主徴とし、即時記憶や意味記憶、手続記憶は障害されず、海馬に器質的損傷がみられない。辺縁系の一過性の機能障害が示唆されているが、発作中のみであり、今回検討された TGA 症例でも WMS-R はほぼ正常範囲内であった。一方、海馬領域に海綿状血管腫を呈した症例では注意・集中力以外すべての項目で異常を呈し、遅延再生が高度に障害されていた。これは短期記憶に重要な役割を持つ海馬に占拠性病変があるためと考えられた。

【結語】 記憶障害を呈する 2 疾患の神経心理学的検査を比較した。この結果、海馬に器質的損傷を有する場合、広汎な記憶障害を指摘できた。病変部位やその広がりを推定するうえで、神経心理学的検査は重要な役割を担うと考える。